

金融商品の購入者について

中京大学 増田ゼミ

井上 翔麻 岩田 絃希 植田 響
宇佐美 瑞 尾崎 聖 広瀬 巧斗

目次

1. 研究動機
2. 金融商品、制度の種類
3. 先行研究
4. 本研究について
5. 利用するデータについて
6. 分析結果
7. まとめ

1. 研究動機

1. 研究の動機

【世の中の動き】

- 2022年の11月に岸田政府が国民の資産形成と経済の活性化の両方を促進させる政策である「**資産所得倍増プラン**」を立案。
- その施策の1つである「**新NISA制度**」が2024年からスタート。

1. 研究の動機

【疑問】

- 実際に**どういう属性**の人が金融商品の投資(株式投資など)を行っているか。
- どの金融商品の投資でも預貯金と比較するとリスクが高いと考えられるが、金融商品によって**投資傾向は変わる**のか？

2. 金融商品、制度の種類

2. 金融商品、制度の種類

【高リスク金融商品】

- FX
- 仮想通貨

【中リスク金融商品】

- 外貨貯金
- 株式
- 投資信託

【低リスク金融商品】

- 債権

2. 金融商品、制度の種類

【中リスク金融制度】

- NISA

【低リスク金融制度】

- 個人年金保険
- 企業型確定拠出年金（401k、企業型DC）
- 個人型確定拠出年金（iDeCo）
- 財形貯蓄
- 国民年金基金

3. 先行研究

3. 先行研究①

駒井・阿部（2005）

- **プレイヤー**：家計
- **研究目的**：家計の金融資産選択において、住宅所有（持家居住）及び住宅ローン残高の大小が危険資産への需要に及ぼす影響
- **推定方法**：タイプⅡのトービット・モデルをヘックマンの2段階推定法

3. 先行研究①

- **使用データ：**

2001年の日本経済新聞社の『金融行動調査』（RADAR）

東京駅を中心とする**首都圏40km圏**に居住する**25歳～74歳**の**男女5,000人**を対象に行われたアンケート調査

（有効回収数：2,906人、回収率：58.1%）

3. 先行研究①

- **推定結果**

1. 住宅所有は危険資産需要に対して**正で有意な影響**を及ぼす。
⇒世間では、**住宅は安全資産**であると考えられている。

2. 住宅ローン残高の年収に対する倍率が危険資産需要に及ぼす
影響

統計的に十分に明確な結果が得られなかった。

3. 先行研究②

顔他(2019)

- **プレイヤー**：個人投資家
- **研究目的**：金融リテラシーの種類や情報源の違いがどのような影響を与えるかを知るため

3. 先行研究②

- **推定方法：**

リスク資産の保有に影響する要因を分析するために**ロジット回帰分析**と、世代やライフサイクルを考慮し、**年齢と性別**でマッチングをした**条件付ロジスティック回帰**を行った。

- **使用データ：**インターネットでのサーベイ調査

2017年2月に実施し、5,571人から回答を収集した。

3. 先行研究②

- **推定結果**

- ◆ 金融リテラシーとリスク資産保有との関係については、リテラシーの高さは日本の個人投資家のリスク資産保有確率を高めており、特に応用的リテラシーの重要性が確認された。
- ◆ 情報源とリスク資産保有との関係については、専門家のアドバイスが保有確率を高めるのは投資信託であって、株式に対する影響は見出せなかった。

3. 先行研究②

- **推定結果**

- ◆ 金融リテラシーや情報源と投資リターンとの関係については、**金融リテラシーの高さや専門家の助言**が投資リターンを高める傾向が見出された。
- ◆ しかしながら、基礎的リテラシーと応用的リテラシーの効果の違いまでは抽出できなかった。

研究の学問的意義 (先行研究との違い)

■ 時代の変化

→先行研究①(2001),先行研究②(2017)⇔**本研究(2020)**

→時代の変化と消費行動の違いを見る

■ 推定方法の違い

→先行研究① (タイプⅡのトービット・モデルをヘックマンの2段階推定法)

→先行研究② (ロジット回帰分析、条件付ロジスティック回帰)

⇔**本研究 (プロビット回帰分析)**

■ 説明変数の違い

→**回答者の配偶者の有無、世帯の金融資産残高1000万円以上、
金融教育の経験の有無**

4.本研究について

4. 本研究について

【本研究の目的】

プログラム言語Rを利用した重回帰分析を行う



リスク別の金融商品を持つ人や、金融制度を使っている
人の特徴を探ります。

- プレイヤー：家計
- 分野：ミクロ

4.本研究について

【被説明変数】

- ①高リスクの金融商品の保有の有無
- ②中リスクの金融商品の保有の有無
- ③低リスクの金融商品の保有の有無
- ④中リスクの金融制度の利用の有無
- ⑤低リスクの金融制度の利用の有無

4.本研究について

【説明変数】

- 回答者の学歴
- 回答者の配偶者の有無
- 世帯の金融資産残高が10万円以上かどうか
- 世帯の金融資産残高が1000万円以上かどうか
- 持ち家の有無
- ローンの有無
- 情報源が信頼性があるものか
- 情報源が信頼性がないものか

4.本研究について

【説明変数】

- 金融教育の経験の有無
- リスク回避度の高低
- 時間割引率の高低
(年金制度に加入したいかどうか)
- 回答者が働いているかどうか
- 回答者の性別
- 回答者の年代
- 全体の正解数(リテラシー、金融問題)

4.本研究について

【仮説】

- 住宅保有は金融商品の保有を高めるだろう
- 金融リテラシーは金融商品の保有を高めるだろう
- 情報源の信頼度は金融商品の購入に影響を与えるだろう
- 時代の変化によって金融商品の消費行動は変化するだろう

5.利用するデータについて

5. 利用するデータについて

【使用データ】

「資産設計のためのリテラシー調査アンケート2020」

〈調査対象〉

学生を除く20歳以上59歳以下の日本国内に住む男女

〈調査対象の単位〉

個人

〈調査時点〉

2020年1月

5. 利用するデータについて

〈サンプルサイズ〉

第1次アンケート 49,968人（有効回収数44,835人）

第2次アンケート 3,000人（有効回収数2,887人）

〈調査方法〉

自記式調査票：Webベース（CAWI）

インターネット調査会社のモニター調査

〈調査実施者〉

株式会社大和総研

※本研究では、第2次アンケートのデータを使用する。

5. 利用するデータについて

【データを選んだ理由】

- 先行研究に似たアンケート調査だったため
- 2020年と**比較的最近**に調査された調査であったため

5. 利用するデータについて

<データクリーニング>

削除したデータ

- ・ 学生
- ・ FinTechの利用状況と関心
- ・ 本人の意識調査
- ・ 将来の働き方
- ・ 不足する老後資金の手当ての意識調査
- ・ アンケート
- ・ 都道府県

<データの加工の方法>

使用したデータはすべて1,0のダミー変数とし、リテラシークイズの正解数のみをそのまま使用した。

5. 利用するデータについて

<分析手法>

プロビット回帰分析法

<データの期間>

先行研究の期間が古かったため、最近のデータを用いて分析すると結果が変わるのか分析したかった。

<分析回数>

被説明変数が、高リスクの金融商品、中リスクの金融商品、低リスクの金融商品、中リスクの金融制度、低リスクの金融制度の計五回

5. 利用するデータについて

<モデル>

$$y = \alpha + \beta_1x_1 + \beta_2x_2 + \beta_3x_3 + \beta_4x_4 + \beta_5x_5 + \beta_6x_6 + \beta_7x_7 + \beta_8x_8 + \beta_9x_9 + \beta_{10}x_{10} + \beta_{11}x_{11} + \beta_{12}x_{12} + \beta_{13}x_{13} + \beta_{14}x_{14} + \beta_{15}x_{15} + \beta_{16}x_{16} + \beta_{17}x_{17} + u$$

5. 利用するデータについて

<モデルの詳細>

y = 被説明変数、 α = 定数項、 x_1 = 回答者の学歴、

x_2 = 回答者の配偶者の有無

x_3 = 世帯の金融資産残高が10万円以上かどうか

x_4 = 世帯の金融資産残高が1000万円以上かどうか、 x_5 = 持ち家の有無

x_6 = ローンの有無、 x_7 = 情報源が信頼性があるものか

x_8 = 情報源が信頼性がないものか、 x_9 = 金融教育の経験の有無、

x_{10} = リスク回避度の高低、 x_{11} = 時間割引率の高低(年金制度に加入したいかどうか)

x_{12} = 回答者が働いているかどうか、 x_{13} = 性別

x_{14} = 年齢ダミー(30代を1, それ以外0)

x_{15} = 年齢ダミー(40代を1, それ以外0)

x_{16} = 年齢ダミー(50代を1, それ以外0)

x_{17} = 全体の正解数 (リテラシー、金融問題)、 u = 誤差項



6.分析結果



分析結果（FX、仮想通貨の保有の有無）	係数	標準誤差
回答者の学歴	0.21	0.11
回答者の配偶者の有無	0.11	0.11
世帯の金融資産残高が10万円以上かどうか	-0.13	0.19
世帯の金融資産残高が1000万円以上かどうか	-0.03	0.11
持ち家の有無	-0.15	0.13
ローンの有無	0.08	0.14
情報源が信頼性があるものか	0.23	0.29
情報源が信頼性がないものか	-0.10	0.12
金融教育の経験の有無	0.14	0.11
リスク回避度の高低	-0.43	0.11***
時間割引率の高低(年金制度に加入したいかどうか)	0.18	0.18
回答者が働いているかどうか	0.02	0.33
性別	0.46	0.12***
年齢ダミー(30代を1,それ以外0)	-0.05	0.14
年齢ダミー(40代を1,それ以外0)	-0.17	0.15
年齢ダミー(50代を1,それ以外0)	-0.13	0.17
全体の正解数（リテラシー、金融問題）	0.01	0.02

6.分析結果

【被説明変数が「①FX、仮想通貨の保有の有無」の時】

〈説明変数が影響を与えたもの〉

リスク回避度の高低	性別
-0.43***	0.46***
(0.11)	(0.12)

()は標準誤差を表している *** 有意水準0.1% ** 有意水準1% * 有意水準5%

分析結果（中リスクの金融商品の保有の有無）	係数	標準誤差
回答者の学歴	-0.19	0.10
回答者の配偶者の有無	-0.16	0.10
世帯の金融資産残高が10万円以上かどうか	-0.09	0.17
世帯の金融資産残高が1000万円以上かどうか	0.33	0.10***
持ち家の有無	0.06	0.11
ローンの有無	0.09	0.12
情報源が信頼性があるものか	0.46	0.21*
情報源が信頼性がないものか	0.01	0.10
金融教育の経験の有無	-0.13	0.09
リスク回避度の高低	-0.26	0.09**
時間割引率の高低(年金制度に加入したいかどうか)	-0.08	0.13
回答者が働いているかどうか	-0.35	0.27
性別	0.35	0.09***
年齢ダミー(30代を1,それ以外0)	-0.17	0.13
年齢ダミー(40代を1,それ以外0)	-0.16	0.13
年齢ダミー(50代を1,それ以外0)	-0.14	0.14
全体の正解数（リテラシー、金融問題）	0.07	0.01***

6.分析結果

【被説明変数が「②中リスクの金融商品の保有の有無」の時】

〈説明変数が影響を与えたもの〉

世帯の金融資産残高(1000万円より大きい かどうか)	信頼性のある情 報を得ている	リスク回避 度の高低	性別	全体正解数
0.33***	0.46*	-0.26**	0.35***	0.07***
(0.10)	(0.21)	(0.09)	(0.09)	(0.01)

()は標準誤差を表している *** 有意水準0.1% ** 有意水準1% * 有意水準5%

分析結果（低リスクの金融商品の保有の有無）	係数	標準誤差
回答者の学歴	-0.21	0.15
回答者の配偶者の有無	-0.10	0.13
世帯の金融資産残高が10万円以上かどうか	0.73	0.43
世帯の金融資産残高が1000万円以上かどうか	0.29	0.13*
持ち家の有無	0.21	0.15
ローンの有無	-0.29	0.16
情報源が信頼性があるものか	0.47	0.44
情報源が信頼性がないものか	0.05	0.13
金融教育の経験の有無	0.02	0.12
リスク回避度の高低	-0.11	0.12
時間割引率の高低(年金制度に加入したいかどうか)	-0.26	0.18
回答者が働いているかどうか	0.00	0.37
性別	0.04	0.13
年齢ダミー(30代を1,それ以外0)	0.04	0.13
年齢ダミー(40代を1,それ以外0)	0.31	0.19
年齢ダミー(50代を1,それ以外0)	0.56	0.20**
全体の正解数（リテラシー、金融問題）	0.08	0.02***

6.分析結果

【被説明変数が「③低リスクの金融商品の保有の有無」の時】

〈説明変数が影響を与えたもの〉

世帯の金融資産残高(1000万円より大きい かどうか)	回答者が50代かどうか	全体正解数
0.29*	0.56**	0.08***
(0.13)	(0.20)	(0.02)
()は標準誤差を表している *** 有意水準0.1% ** 有意水準1% * 有意水準5%		

分析結果（中リスクの金融制度の利用の有無）	係数	標準誤差
回答者の学歴	-0.16	0.10
回答者の配偶者の有無	-0.14	0.10
世帯の金融資産残高が10万円以上かどうか	0.37	0.19*
世帯の金融資産残高が1000万円以上かどうか	-0.02	0.10
持ち家の有無	0.02	0.11
ローンの有無	0.01	0.12
情報源が信頼性があるものか	-0.14	0.22
情報源が信頼性がないものか	-0.04	0.10
金融教育の経験の有無	-0.06	0.09
リスク回避度の高低	-0.28	0.09**
時間割引率の高低(年金制度に加入したいかどうか)	0.17	0.14
回答者が働いているかどうか	-0.23	0.31
性別	0.03	0.10
年齢ダミー(30代を1,それ以外0)	-0.18	0.13
年齢ダミー(40代を1,それ以外0)	-0.33	0.13*
年齢ダミー(50代を1,それ以外0)	-0.27	0.14
全体の正解数（リテラシー、金融問題）	0.09	0.01***

6.分析結果

【被説明変数が「④中リスクの金融制度の利用の有無」の時】

〈説明変数が影響を与えたもの〉

世帯の金融資産残高(10万円より大きいかどうか)	リスク回避度の高低	回答者が40代かどうか	全体正解数
0.37**	-0.28**	-0.33*	0.09***
(0.19)	(0.09)	(0.13)	(0.01)

()は標準誤差を表している *** 有意水準0.1% ** 有意水準1% * 有意水準5%

分析結果（低リスクの金融制度の利用の有無）	係数	標準誤差
回答者の学歴	-0.13	0.10
回答者の配偶者の有無	-0.10	0.10
世帯の金融資産残高が10万円以上かどうか	0.07	0.17
世帯の金融資産残高が1000万円以上かどうか	0.36	0.10***
持ち家の有無	-0.01	0.11
ローンの有無	0.12	0.12
情報源が信頼性があるものか	-0.13	0.21
情報源が信頼性がないものか	0.17	0.10
金融教育の経験の有無	0.18	0.09*
リスク回避度の高低	-0.18	0.09*
時間割引率の高低(年金制度に加入したいかどうか)	0.26	0.13
回答者が働いているかどうか	-0.69	0.28*
性別	0.40	0.09***
年齢ダミー(30代を1,それ以外0)	-0.10	0.13
年齢ダミー(40代を1,それ以外0)	-0.12	0.13
年齢ダミー(50代を1,それ以外0)	-0.01	0.14
全体の正解数（リテラシー、金融問題）	-0.01	0.01

6.分析結果

【被説明変数が「⑤低リスクの金融制度の利用の有無」の時】

〈説明変数が影響を与えたもの〉

世帯の金融資産残高(1000万円より大きいかどうか)	金融教育の有無	リスク回避度の高低	働いているかどうか	性別
0.36***	0.18*	-0.18*	0.69*	0.40***
(0.10)	(0.09)	(0.09)	(0.28)	(0.09)

()は標準誤差を表している *** 有意水準0.1% ** 有意水準1% * 有意水準5%

6.分析結果

■ 住宅保有は金融商品の保有を高めるだろう

→住宅保有は金融商品の保有に有意ではない。

6.分析結果

■金融リテラシーは金融商品の保有を高めるだろう

→FX,偽装通貨,D5(低リスクの金融制度の利用の有無)には有意ではない。それ以外に関しては、正に有意。

⇒FX,偽装通貨はギャンブル性が高すぎるため、金融商品として考えられていないのでは。

6.分析結果

■情報源の信頼度は金融商品の購入に影響を与えるだろう

→信頼度の高い情報は中リスクの金融商品（外貨貯蓄、株式、投資信託）の保有に正に有意。

⇒先行研究②(2017)には株式に対する専門家の助言の影響は見られなかった。⇔本研究では(2020)では株式に対しても正に有意。

6.分析結果

■時代の変化によって金融商品の消費行動は変化するだろう

→先行研究①(2001)には住宅の保有は正に有意⇔本研究(2020)には有意ではない。

⇒住宅が安全資産ではないと考えられるようになった？

7.まとめ

7.まとめ

■ 実際にどういう属性の人が金融商品に投資をしているのか。

→FX、仮想通貨、中リスクの金融商品は男性でリスク回避度が低い人が購入する傾向にある。また、リテラシーが高い人は、中リスクの金融商品、低リスク金融商品を購入する傾向にある。

⇒FX、仮想通貨は金融商品として見られていないと考えられる。それに付随して、中リスク、低リスク金融商品を買う人は安定的に資産を増やすために勉強している人が多い。

7.まとめ

■ 実際にどういう属性の人が金融商品に投資をしているのか。

→金融資産に余裕があり、50代でリテラシーがある人が買う傾向にある。

⇒老後の資金に余裕を持たせるために安定して資産を増やそうと考える人が多いと考えた。

7.まとめ

■ 実際にどういう属性の人が金融制度に投資をしているのか。

→中リスクの金融制度を投資するのはリテラシーは高いが、リスク回避度が低い人が投資する傾向がある事が本研究で読み取れた。

⇒矛盾する結果であったため、今後もう一度研究し直す必要があると考えた。

7.まとめ

■ 実際にどういう属性の人が金融制度に投資をしているのか。

→低リスクの金融制度を投資するのは男性が多く、働いている人で、リスク回避度が低い人が多い傾向があった。

⇒これは、企業で働いている人が、入っている制度であるからと考えられる。そのため、自分で考えることなく投資しているのではないかと考える。

7.まとめ

- どの金融商品の投資でも預貯金と比較するとリスクが高いと考えられるが、金融商品によって投資傾向は変わるのか？

→中リスクの金融商品、低リスクの金融商品、中リスクの金融制度は、リテラシーが高い人ほど買う傾向にあるが、FX、仮想通貨、低リスクの制度はリテラシー関係なく投資をしている。

⇒リスク別の金融商品、制度の傾向の違いは本研究で読み取る事が出来たが、預貯金の傾向のデータがなかったため比較することが出来なかった。そのため今後もう一度研究し直す必要があると考えた。

参考資料のURL

【先行研究】

- 駒井正晶・阿部由里, 『住宅所有と家計の危険資産選択：ミクロ・データによる分析』
<https://www.jasfp.jp/img/file10.pdf>(2024/4/24アクセス)
- 顔菊馨・近藤隆則・白須洋子・三隈隆司, 『日本の個人投資家のリスク資産投資：金融リテラシーの種類や情報源の違いはどのような影響を与えるのか？』
[JJF00324.pdf](#)(2024/4/24アクセス)

【使用データ】

- SSJDA,株式会社大和総研, 「資産設計のためのリテラシー調査アンケート2020」,
<https://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/Direct/gaiyo.php?lang=jpn&eid=1535>
(2024/5/28アクセス)

ご清聴ありがとうございました。
ございました。